

はマルタニシ、ドブシジミ、キイロサナエ、アオサナエ、フタスジサナエ、オグマサナエ、コオイムシの7種が確認された。

現地調査において確認された注目すべき種および確認状況を表7-11-21に、確認位置を図7-11-10～図7-11-15に示す。なお貴重性が高い種と猛禽類については保護の観点から詳細な情報は秘匿した。

表7-11-21 注目すべき動物

(1/12)

項目	種 名	選 定 基 準						確 認 状 況 な ど
		A	B	C	D	E	F	
哺乳類	ホンドザル	要注						対象事業実施区域内の林内に設置した自動撮影装置で四季を通じて計13個体が撮影された。区域外では、林内および水田地帯に設置した自動撮影装置で4季を通じて計79個体が撮影されたほか、冬と春に群れが目撃された。また工業団地周辺でも糞が確認された。
	ホンシュウカヤネズミ	希少						対象事業実施区域外の高茎草地で巣が確認された。
鳥類	オシドリ	希少		ランク3	DD			対象事業実施区域外で冬季に1例のみ確認された。7羽の小群で池の水面に張り出した常緑樹の樹上で休息していた。
	マガモ			ランク3				対象事業実施区域外で冬季に1例のみ確認された。1羽で池の水面で休息していた。
	カイツブリ	希少						対象事業実施区域外で春季に3例、初夏に2例、秋季に1例が確認された。初夏には幼鳥2羽を含む4個体が池で確認され、水面で休息する様子や幼鳥へ給餌していたことから繁殖していると考えられる。
	アオバト	希少						対象事業実施区域内で春季に1例が確認された。落葉広葉樹林内から鳴声を確認したが行動の詳細は不明であった。また3～5月の猛禽類調査時には区域内外で樹林上空を飛行する様子や鳴声が複数例確認された。区域外では冬季に1例、春季に3例が確認された。いずれも繁殖期には確認されておらず、当地での繁殖の可能性は低いと考えられる。
	ミゾゴイ	増大		ランク2	VU			<u>対象事業実施区域外で5月の猛禽類調査時に1例のみ確認された。</u>
	ゴイサギ	希少						対象事業実施区域外で春季に2例確認された。いずれも夜間調査時に鳴き声での確認であり、繁殖に関する情報は得られなかった。
	アマサギ	要注目						対象事業実施区域外で春季に1例確認された。耕起中の水田で、コサギの小群とともに採餌する様子の確認であり、繁殖に関する情報は得られなかった。
	チュウサギ	希少		ランク3	NT			対象事業実施区域外で春季に2例、秋季に1例が確認された。また4月の猛禽類調査時にも3例が確認された。1～3羽が水田で採餌する様子や畦で休息する様子が見られたが繁殖に関する情報は得られなかった。

表 7 - 1 1 - 2 1 注目すべき動物

(2/12)

項目	種 名	選 定 基 準						確 認 状 況 な ど
		A	B	C	D	E	F	
鳥類	コサギ	要注目						対象事業実施区域外で春季に1例、6月の猛禽類調査時にも1例が確認された。水田で探餌する様子が確認されたが、繁殖に関する情報は得られなかった。
	ヒクイナ	増大		ランク2	NT			対象事業実施区域外で春季に1例のみ確認された。休耕田と思われる湿地から鳴声のみの確認であり、行動の詳細は不明である。繁殖に関する情報は得られなかった。
	ホトトギス	希少		ランク3				対象事業実施区域内で初夏に3例が確認された他、6～7月の猛禽類調査時にも複数例確認された。主に落葉広葉樹林内でのさえずりにより確認された。区域外でも同様の時期に広範囲で多数のさえずりが確認された。托卵相手が主にウグイスであることや当地の環境を勘案すると対象事業実施区域内外の樹林で繁殖している可能性は高い。
	ツツドリ	希少		ランク3				対象事業実施区域外で秋季に1例のみ確認された。耕作地上空を1羽で飛翔する様子が確認され、渡り途中の個体であったと推定される。
	ケリ				DD			対象事業実施区域内で春季および初夏に各1例が飛翔する様子が確認された。区域外では春季～秋季にかけて、農耕地や草地を中心に多数確認され、縄張り防衛行動や若鳥が確認されたことから周辺地域で繁殖していると考えられる。対象事業実施区域内については、環境を勘案すると主な生息地としては利用せず、一時的に飛翔通過する程度であると推察される。
	イカルチドリ	希少		ランク3				対象事業実施区域外で秋季に3例が確認された。また2～6月の猛禽類調査時にも8例が確認された。秋季には農耕地で数個体が探餌する様子が確認された。春季には造成裸地などで1個体で確認されることが多かったが、繁殖に関する情報は得られなかった。
	コチドリ	希少		ランク3				対象事業実施区域外で春季に8例、初夏に7例が確認された。また4～7月の猛禽類調査時にも複数例が確認され、対象事業実施区域内の上空でも飛翔や鳴声が確認された。確認時は水田や畦で探餌する様子のほか、造成裸地では縄張り争いや偽傷行動が見られ、繁殖している可能性が高いが、区域内については、環境を勘案すると主な生息地としては利用せず、一時的に飛翔通過する程度であると推察される。
	タシギ	希少		ランク3				対象事業実施区域内で春季に1例のみ確認され、放棄水田跡で1個体が休息していた。区域外では冬季に2例、春季に5例、秋季に1例が確認され、主に水田や湿地で探餌や休息していた。

表 7 - 1 1 - 2 1 注目すべき動物

(3/12)

項目	種 名	選 定 基 準						確 認 状 況 な ど
		A	B	C	D	E	F	
鳥類	クサシギ	希少		ランク 3				対象事業実施区域内で冬季に 1 例、春季に 1 例、3 月と 5 月の猛禽類調査時に各 1 例が確認された。区域外では冬季に 2 例、春季に 1 例、秋季に 2 例、5 月の猛禽類調査時に 1 例が確認された。主に水田や水路、河川の水際で採餌や休息していた。
	イソシギ	希少		ランク 2				対象事業実施区域外で 4 月の猛禽類調査時に 2 例が確認された。いずれも同じ調整池の水際で 1 個体が採餌していた。
	ミサゴ	希少		ランク 2	NT			<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 3 月～5 月にのべ 3 例が確認された。</u>
	ハチクマ	増大		ランク 2	NT			<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 5 月～8 月にのべ 101 例が確認された。</u>
	ツミ	希少		ランク 3				<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 3 月～8 月にのべ 6 例が確認された。</u>
	ハイタカ	希少		要注目	NT			<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 3 月～5 月にのべ 26 例が確認された。</u>
	オオタカ	希少		ランク 3	NT			<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 2 月～7 月にのべ 98 例が確認された。</u>
	サシバ	希少		ランク 2	VU			<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 4 月～7 月にのべ 111 例が確認された。</u>
	ノスリ	希少		ランク 3				<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 2 月～4 月にのべ 50 例が確認された。</u>
	クマタカ	危惧		ランク 2	EN	国内		<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 3 月に 1 例のみが確認された。</u>
	フクロウ	希少		ランク 3				対象事業実施区域内で春季に 2 例、初夏に 2 例が確認された。いずれも夜間調査時に落葉広葉樹林内からの鳴声での確認であった。区域外では春季に 4 例、初夏に 1 例、社寺林や落葉広葉樹林内での鳴声が確認された。いずれも行動の詳細は不明であり、繁殖に関する情報は得られなかったが、対象事業実施区域内を踏査した限りでは繁殖は確認されなかった。周辺の社寺林では、環境を勘案すると繁殖している可能性がある。
	カワセミ	希少		ランク 3				対象事業実施区域内では春季に 1 例、初夏に 2 例、3～7 月の猛禽類調査時に 14 例が確認された。主に池での採餌や周辺の樹林上空で鳴声が確認され、池を餌場として利用していると考えられる。区域外では通年、複数例が確認され、主に河川や水路、池を餌場として利用していた。繁殖に関する情報は得られなかったが、近隣の環境を勘案すると周辺地域で繁殖している可能性は高い。
	ブッポウソウ	危惧	指定	ランク 1	EN			<u>対象事業実施区域外で 5 月の猛禽類調査時に 1 例のみ確認された。</u>

表 7-11-21 注目すべき動物

(4/12)

項目	種 名	選 定 基 準						確 認 状 況 な ど
		A	B	C	D	E	F	
鳥類	アリスイ	希少		ランク 3				対象事業実施区域外で秋季に 1 例のみ確認された。ススキ草地内の灌木に 1 個体でとまって休憩していた。
	オオアカゲラ	希少		ランク 3				対象事業実施区域内で猛禽類調査時の 3 月に 4 例、6 月に 1 例が確認された。いずれも落葉広葉樹林内で採餌または採餌していた。区域外では春季および秋季、猛禽類調査時の 6 月と 7 月に各 1 例が確認された。いずれも落葉広葉樹林や常緑樹林内で採餌していたが、繁殖に関する情報は得られなかった。
	アカゲラ			ランク 3				対象事業実施区域内では秋季に 1 例、3～6 月の猛禽類調査時に 13 例が確認された。区域外では通年、複数例が確認された。主に落葉広葉樹林や常緑樹林内で採餌する様子や鳴声が確認されたが、繁殖に関する情報は得られなかった。
	アオゲラ			ランク 3				対象事業実施区域内では冬季、春季、秋季に各 1 例、3～7 月の猛禽類調査時に 10 例が確認された。区域外では秋季および 3～7 月の猛禽類調査時に、複数例が確認された。主に落葉広葉樹林やアカマツ林、常緑樹林内で採餌する様子や鳴声が確認された。繁殖に関する情報は得られなかったが、環境を勘案すると繁殖している可能性がある。
	チョウゲンボウ	希少		ランク 3				<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 4 月～5 月にのべ 3 例が確認された。</u>
	ハヤブサ	希少		ランク 3	VU	国内		<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 3 月～6 月にのべ 5 例が確認された。</u>
	サンショウクイ	希少		ランク 3	VU			対象事業実施区域内で春季に 2 例、初夏に 1 例、4～7 月の猛禽類調査時に 11 例が確認された。区域外でも同様の時期に複数例が確認された。主に林冠付近からの鳴声や上空を飛翔していたが、繁殖に関する情報は得られなかった。なお、観察個体の中に亜種リュウキュウサンショウクイが少なくとも 1 例含まれていた。
	サンコウチョウ	希少		ランク 3				対象事業実施区域内で初夏に 3 例、5～6 月の猛禽類調査時に 4 例が確認された。区域外でも同様の時期に複数例が確認された。主に落葉広葉樹林や常緑樹林で、さえずりによる確認であった。さえずり以外に繁殖に関する情報は得られなかったが、環境を勘案すると繁殖している可能性は高い。
	コシアカツバメ	その他						対象事業実施区域内で春季に 1 例、初夏に 2 例、5～7 月の猛禽類調査時に 9 例が確認され、草地上空を飛翔しながら採餌する様子が観察された。区域外では春季～秋季に複数例が確認された。主に河川や水田、草地上空で採餌していたが、佐久良川の橋で繁殖巣が 9 巣確認された。

表 7-11-22 注目すべきほ乳類の影響予測結果

種 名	確認状況など	生態など	影響の内容と程度
ホンドザル	対象事業実施区域内の林内に設置した自動撮影装置で四季を通じて計13個体が撮影された。区域外では、林内および水田地帯に設置した自動撮影装置で4季を通じて計79個体が撮影されたほか、冬と春に群れが目撃された。また工業団地周辺でも糞が確認された。	本種は日本(本州、四国、九州)固有亜種で、現生のサルでは最も北(下北半島)まで分布する。常緑広葉樹林や落葉広葉樹林に生息し、昼行性で食性は植物食傾向の強い雑食で、主に果実を食べるが、植物の葉、芽、草、花、種子、キノコ、昆虫なども食べる。	確認状況および生態から、対象事業実施区域および周辺ではコナラ林をおもな生息域として多様な環境を利用していると考えられる。本事業によりコナラ林の一部が消滅するため行動圏や採餌環境が一部縮小されることは免れないと考えられるが、同様の環境は周辺に広く分布しており、周辺地域へ移動して生存すると考えられることから影響は軽微であると予測される。
ホンシュウ カヤネズミ	対象事業実施区域外の高茎草地で巣が確認された。	本種は日本では東北地方および南西諸島を除く地域で確認されており、イネ科植物の優占する草地、河川敷、堤防、麦畑などに生息し、低地の草地、水田、休耕田、沼沢地などのイネ科植物が密生した水気のあるところを好む。行動圏は雄が400㎡、雌が350㎡程度とされている。	対象事業実施区域内で巣は確認されておらず、本種が生息している可能性は低いこと、工事範囲と巣が確認された区域周辺のイネ科高茎草地の間には野川があり、改変区域への移動は難しいと考えられることから工事による影響はないと予測される。ただし、工事用道路の敷設や資材置き場の設置に際しては周辺の生息地に影響がでないように注意する必要がある。

鳥類については、現地調査でキジバト、ダイサギ、ホトトギス、サシバ、ヤマガラ、ヒヨドリ、ウグイス、キビタキ、ホオジロ等109種の生息が確認された。確認个体数が多い種は当該地域に普通に生息するもので、森林性のキツツキ類やカラ類、ヒタキ類と、草原性のホオジロ類に加えて水辺に棲むチドリ類やサギ類、セキレイ類が確認されており、様々な環境が混在する調査範囲の状況を反映していると考えられる。確認数が多く、出現頻度も高いのはヒヨドリやカワラヒワ、エナガ、ホオジロ、ウグイス、コゲラ、メジロ、シジュウカラのような里山の鳥およびスズメやハシブトガラスなどの人里の鳥であり、全体的には里山の環境を代表する種が優占していると考えられる。

これらの鳥類は対象事業実施区域を含めて周辺の丘陵地や農耕地を広域的に生息場所としていると考えられ、キツツキ類やカラ類、ヒタキ類などの樹林性の鳥やウグイス等林縁部に生息する種は、事業の実施により周辺部の樹林へ移動して生息を続けるものと考えられる。工事終了後は緑地や法面に植栽が施されることから、スズメ、ヒヨドリ、ホオジロ等開けた環境に生息する種については、个体数が増加する可能性もあると考えられる。ウグイス等林縁部に生息する種についても植栽樹の成長に伴い、周辺の森林や緑地が安定すれば戻ってくる可能性もあると考えられる。

工事による騒音の影響については、対象事業実施区域周辺は現状でも隣接する国道307号や町道石原鳥居平線、日野第一工業団地や耕作水田等からの騒音があり、繁殖活動への影響は比較的小さいと考えられる。

なお、注目すべき陸生動物として抽出した各種については以下のように予測される。

ただし貴重性が高い種と猛禽類については保護の観点から詳細な情報は秘匿した。

表 7-11-23 注目すべき鳥類の影響予測結果

(1/14)

種 名	確認状況など	生態など	影響の内容と程度
オシドリ	対象事業実施区域外で冬季に 1 例のみ確認された。7 羽の小群で池の水面に張り出した常緑樹の樹上で休息していた。	本種は東アジア（ロシア南東部、朝鮮半島、日本、中国など）に分布する。日本では北海道や本州中部以北の山間部にある大木の樹洞などに巣をつくり繁殖し、冬季になると本州以南（主に西日本）へ南下し越冬する。溪流、湖沼などに生息し、水辺の木陰を好み、開けた水面にはあまり出ない。食性は植物食傾向の強い雑食で、水生植物、果実、種子、昆虫、陸生貝類などを食べる。	本種の生態から、対象事業実施区域内を採餌場所として利用する可能性は否定できないものの、現地調査では利用は確認されておらず、本種の繁殖に適した樹洞のある大木も区域内にはないことから、事業による影響は軽微であると予測される。
マガモ	対象事業実施区域外で冬季に 1 例のみ確認された。1 羽で池の水面で休息していた。	本種は北半球の冷帯から温帯に広く分布し、日本では亜種マガモが冬鳥として北海道から南西諸島まで全国的に渡来するが、滋賀県では湖沼の水際の湿性草原に営巣し繁殖しており留鳥である。湖沼、河川、海岸に生息し、群れを形成して生活する。食性は植物食が主の雑食で、水草の葉や茎、植物の種子、貝などを食べる。	本種の生態から、対象事業実施区域内の水域を越冬期の採餌場所として利用する可能性は否定できないものの、現地調査では利用は確認されておらず、事業による影響は軽微であると予測される。
カイツブリ	対象事業実施区域外で春季に 3 例、初夏に 2 例、秋季に 1 例が確認された。初夏には幼鳥 2 羽を含む 4 個体が池で確認され、水面で休息する様子や幼鳥へ給餌していたことから繁殖していると考えられる。	本種はアフリカ大陸、ユーラシア大陸の中緯度以南に分布し、日本では本州中部以南では留鳥として周年生息する。流れの緩やかな河川、湖沼、湿原などに生息し、ほとんど水上で生活する。ヨシ原や抽水植物の群落に水草類を積み上げた浮巣を作り繁殖する。食性は主に動物食で、魚類、昆虫、甲殻類、貝類などを食べる。	本種の生態から、対象事業実施区域内の水域を繁殖場所、採餌場所として利用する可能性は否定できないものの、現地調査では利用は確認されておらず、事業による影響は軽微であると予測される。
アオバト	対象事業実施区域内で春季に 1 例が確認された。落葉広葉樹林内から鳴声を確認したが行動の詳細は不明であった。また 3～5 月の猛禽類調査時には区域内外で樹林上空を飛翔する様子や鳴声が複数例確認された。区域外では冬季に 1 例、春季に 3 例が確認された。いずれも繁殖期には確認されていない。	本種は本州、四国、九州で繁殖する留鳥で、県内では山間部を中心に広く記録がある。広葉樹林や針広混交林を好み、植物食で果実や種子等を食べる。冬季には平地や琵琶湖岸でも見られる。	確認状況および生態から、少数が対象事業実施区域内外の樹林を越冬場所として利用していると考えられる。事業の実施に伴う樹林の伐採により、越冬場所が減少するが、区域内を選択的に利用しているとは考えられず、周辺地域には同等の樹林環境が広く見られるため、影響は軽微であると予測される。
ミゾゴイ	<u>対象事業実施区域外で 5 月の猛禽類調査時に 1 例のみ確認された。</u>	<u>本種はインドネシア、中華人民共和国南東部、台湾、大韓民国、日本、フィリピン、ロシア東部に分布し、ほぼ日本（本州、四国、九州、伊豆諸島など）で、よく茂った林の樹上に枯れ枝を組み合わせた皿状の巣をつくり繁殖する。冬季になると主にフィリピンへ南下し越冬する。標高 1,000 メートル以下にある平地から低山地にかけての森林に生息し、昆虫、サワガニなどの甲殻類、陸生貝類、ミミズなどを食べる。</u>	(情報を秘匿)



表 7-11-23 注目すべき鳥類の影響予測結果

(4/14)

種 名	確認状況など	生態など	影響の内容と程度
コチドリ	対象事業実施区域外で春季に 8 例、初夏に 7 例が確認された。また 4～7 月の猛禽類調査時にも複数例が確認され、対象事業実施区域内の上空でも飛翔や鳴声が確認された。確認時は水田や畦で採餌する様子のほか、造成裸地では縄張り争いや偽傷行動が見られ、繁殖している可能性が高い。区域内については一時的に飛翔通過する程度であると推察される。	本種は夏鳥として本州、四国、九州に渡来し、海岸や河川の中流域、湖、池、沼、水田、畑等に生息し、海岸の砂浜や埋立地、内陸の畑や造成地などに巣をつくり繁殖する。県内では全域の平地に渡来し、琵琶湖岸や造成地で繁殖している。開発途中の荒地で繁殖することが多い。食性は動物食で、昆虫類、ミミズ類などの節足動物を食べ、ユスリカ類の小型昆虫をよく食べる。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内で繁殖している可能性はほぼなく、採餌等で利用している可能性も低いことから、事業による影響は軽微であると予測される。 なお、本事業で形成された造成地が長期間、砂利舗装の状態で維持された場合は、新たな繁殖地として利用される可能性がある。
タンギ	対象事業実施区域内で春季に 1 例のみ確認され、放棄水田跡で 1 個体が休息していた。区域外では冬季に 2 例、春季に 5 例、秋季に 1 例が確認され、主に水田や湿地で採餌や休息していた。	本種はユーラシア大陸北部の湿地、草原、湿ったツンドラなどで繁殖し、冬季はインド、東南アジアに渡り越冬する。日本では、春と秋に渡りの途中に飛来する旅鳥である。県内では冬鳥として琵琶湖岸や河川下流の砂浜、水田、休耕田の湿地に生息し、昆虫類、節足動物、甲殻類、種子等を食べる。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内外の水田や湿地を越冬場所や渡りの中継地として利用していると考えられる。事業の実施に伴う湿地の消失により、越冬場所や渡りの中継地の減少が生じるが、区域内を選択的に利用しているとは考えられず、同等の水田や湿地環境は周辺地域に広く見られるため、影響は軽微であると予測される。
クサシギ	対象事業実施区域内で冬季に 1 例、春季に 1 例、3 月と 5 月の猛禽類調査時に各 1 例が確認された。区域外では冬季に 2 例、春季に 1 例、秋季に 2 例、5 月の猛禽類調査時に 1 例が確認された。主に水田や水路、河川の水際で採餌や休息していた。	ユーラシア大陸北部で広く繁殖し、冬季はアフリカ、中東、インド、中国南部、東南アジアへ渡り越冬する。日本では旅鳥として春と秋の渡りの時期に全国的に渡来し、関東地方より南部では一部冬鳥として越冬する。県内では琵琶湖岸、全域の内湖、平地の水田、河川、湿地などに生息する。食性は主に動物食で、水深の浅い場所で、昆虫類や甲殻類、貝類などを捕食する。植物の種子を食べることもある。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内外の湿地や水路、河川を越冬場所や渡りの中継地として利用していると考えられる。事業の実施に伴う湿地や水路の消失により、越冬場所や渡りの中継地の減少が生じるが、区域内を選択的に利用しているとは考えられず、同等の水辺環境は周辺地域に広く見られるため、影響は軽微であると予測される。
イソシギ	対象事業実施区域外で 4 月の猛禽類調査時に 2 例が確認された。いずれも同じ調整池の水際で 1 個体が採餌していた。	本種は九州以北に周年生息する留鳥で、水辺の草原にある植物の根元などに浅い窪みを掘り枯草などを敷いた巣で繁殖する。県内では琵琶湖岸、全域の内湖・平地の河川の中下流、湖沼・水田の周辺に概ね一年中生息するが繁殖記録はない。食性は動物食で昆虫、甲殻類、軟体動物を食べる。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内を利用している可能性はほぼなく、事業による影響は軽微であると予測される。
ミサゴ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の 3 月～5 月にのべ 3 例が確認された。</u>	<u>本種は日本では留鳥として全国に分布し、主に海岸に生息するが内陸部の湖沼、広い河川、河口等にも生息する。食性は肉食性で主に魚類を食べるが、爬虫類、鳥類、貝類を食べることもある。</u>	(情報を秘匿)

表 7-11-23 注目すべき鳥類の影響予測結果

(5/14)

種 名	確認状況など	生態など	影響の内容と程度
ハチクマ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の5月～8月にのべ101例が確認された。</u>	<u>本種は、初夏に夏鳥として渡来し、九州以北の各地の丘陵地から山地にかけての森林に生息し、繁殖する。秋には九州から五島列島を経て大陸に渡り、そこから南下して東南アジアで越冬するが、毎年同じ縄張りに戻ってきて育雛する。食性は動物食で、夏にはスズメバチ類やアシナガバチ類といった社会性の狩り蜂の巣に詰まった幼虫や蛹を主たる獲物として巣に運んで雛に与える。ハチ類の少なくなる秋から冬にかけては、他の昆虫類、小型の齧歯類、は虫類なども捕食する。</u>	(情報を秘匿)
ツミ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の3月～8月にのべ6例が確認された。</u>	<u>本種は日本では基亜種が温暖な地域では周年生息するが、寒冷地では冬季に南下することもある。平地から山地の森林に生息し、食性は動物食で、主に小形鳥類を食べるが、爬虫類、小形哺乳類、昆虫なども食べる。</u>	(情報を秘匿)
ハイタカ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の3月～5月にのべ26例が確認された。</u>	<u>本種は漂鳥で、本州以北で繁殖するが、滋賀県での繁殖は確認されていない。主にツグミくらいまでの小鳥を捕食し、ネズミやリス、ヒミズなどを捕らえる事もある。</u>	(情報を秘匿)
オオタカ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の2月～7月にのべ98例が確認された。</u>	<u>本種は四国の一部および本州、北海道、九州の広い範囲で繁殖し、滋賀県では留鳥として年中生息するが、秋から冬になると高地や山地に生息する個体の一部は低地や暖地に移動する。主にツグミくらいの小鳥からハト、カモ、シギを捕食し、ネズミ、ウサギなども餌にする。</u>	(情報を秘匿)
サンバ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の4月～7月にのべ111例が確認された。</u>	<u>本種は、夏鳥として渡来し、九州から青森県にかけての低地から山地で繁殖し、冬季は中国南部、ニューギニア島、フィリピンに渡って過ごす。ヘビ、トカゲ、カナヘビやキリギリスなどのバッタ類、ヒヨドリ、トノサマガエルなどのカエル類を捕食する。</u>	(情報を秘匿)
ノスリ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の2月～4月にのべ50例が確認された。</u>	<u>本種は、北海道から四国で繁殖し、秋、冬には全国に分散する。主にネズミなどの小型ほ乳類、カエル、ヘビ、鳥など捕食する。</u>	(情報を秘匿)
クマタカ	<u>対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の3月に1例のみが確認された。</u>	<u>本種は日本では、北海道から九州の山地の森林地帯に、留鳥として広く分布しており、森林から草地まで様々な環境に生息する多様な動物を捕食するが、特にノウサギ、リス、モグラなど哺乳類、ヤマドリや中型の鳥類、ヘビ類などを好む。</u>	(情報を秘匿)



表 7-11-23 注目すべき鳥類の影響予測結果

(6/14)

種 名	確認状況など	生態など	影響の内容と程度
フクロウ	対象事業実施区域内で春季に2例、初夏に2例が確認された。いずれも夜間調査時に落葉広葉樹林内からの鳴声での確認であった。区域外では春季に4例、初夏に1例、社寺林や落葉広葉樹林内での鳴声が確認された。いずれも行動の詳細は不明であり、繁殖に関する情報は得られなかったが、対象事業実施区域内を踏査した限りでは繁殖は確認されなかった。周辺の社寺林では、環境を勘案すると繁殖している可能性がある。	スカンジナビア半島から日本にかけてユーラシア大陸北部に帯状に広く分布する。温帯から亜寒帯にかけての針葉樹林、混交林、湿地、牧草地、農耕地などに生息し、留鳥として定住性が強い。日本では九州以北から、四国、本州、北海道にかけて分布する留鳥で、平地から低山、亜高山帯にかけての森林、農耕地、草原、里山などに生息する。県内では全域の社寺林や丘陵地から山間部に周年生息し、主に樹洞に巣をつくる。食性は動物食で、主にネズミや小型の鳥類を食べるが、モグラやヒミズ、モモンガ、リスといった小型の哺乳類、カエルなどの両生類、爬虫類、カブトムシやセミなどの昆虫なども食べる。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内外の樹林を広く利用していると考えられるが、区域内での繁殖は確認されず、餌場として利用していると考えられる。事業の実施に伴う樹林の伐採・土地の改変により、餌場が減少する。区域内を選択的に利用しているとは考えられず、周辺地域には同等の樹林環境が広く見られるが、生態系上位種の本種に対しては事業の実施による影響は中程度と予測される。
カワセミ	対象事業実施区域内では春季に1例、初夏に2例、3～7月の猛禽類調査時に14例が確認された。主に池での採餌や周辺の樹林上空で鳴声が確認され、池を餌場として利用していると考えられる。区域外では通年、複数例が確認され、主に河川や水路、池を餌場として利用していた。繁殖に関する情報は得られなかったが、近隣の環境を勘案すると周辺地域で繁殖している可能性は高い。	本種は、本州以南では留鳥として全国に分布し、県内ではため池や河川、琵琶湖岸に周年生息する。崖など土が露出したところに穴を掘って巣をつくり繁殖する。水辺の杭や堤防、草などに止まって、獲物となる川魚(ウグイ、オイカワ等)、ザリガニ、エビ、カエルを採し、見つけると水面に飛び込んで捕食する。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内外の池や水路、河川を中心に広く生息していると考えられる。事業の実施に伴い区域内のため池の消失により、餌場が減少するが、区域内には本種の営巣適地は確認されなかったことに加え、区域内を選択的に利用しているとは考えられず、同等の水辺環境は周辺地域に広く見られるため、影響は軽微であると予測される。
ブッポウソウ	<u>対象事業実施区域外で5月の猛禽類調査時に1例のみ確認された。</u>	<u>本種は本州、四国、九州に夏鳥として渡来し、冬は東南アジアに渡る。水辺に近い森林に生息し、生息域内では平地から山地まで分布する。主に樹洞を巣にするが、キツツキが穴を空けた木製の電柱や鉄橋の穴、ダムに設けられた排水溝等を巣として利用することもある。県内では全域で記録があり、平地から山地の森や集落、農耕地に隣接した林に生息する。食性は動物食で昆虫類等を食べる。</u>	(情報を秘匿)
アリスイ	対象事業実施区域外で秋季に1例のみ確認された。ススキ草地内の灌木に1個体でとまって休憩していた。	本種はアフリカ大陸、ユーラシア大陸、イギリス、日本に分布し、北海道、本州北部では夏季に繁殖のため飛来し、本州中部以西では冬季に越冬のため飛来する。県内では冬鳥として大津市、草津市、近江八幡市などに渡来し、琵琶湖畔、内湖林縁、ヨシ原周辺の開けた雑木林に生息する。食性は動物食で、地表や朽ち木に止まって舌を伸ばし、主にアリを捕食することが和名の由来になっている。	本種の生態から、対象事業実施区域内を冬季の採餌場所として利用している可能性は否定できないが、現地調査では利用は確認されておらず、事業による影響は軽微であると予測される。

表 7-11-23 注目すべき鳥類の影響予測結果

(7/14)

種 名	確認状況など	生態など	影響の内容と程度
オオアカゲラ	対象事業実施区域内で猛禽類調査時の3月に4例、6月に1例が確認された。いずれも落葉広葉樹林内で採餌または採餌していた。区域外では春季および秋季、猛禽類調査時の6月と7月に各1例が確認された。いずれも落葉広葉樹林や常緑樹林内で採餌していたが、繁殖に関する情報は得られなかった。	本種はシベリア南部、モンゴル、中国東北部、ウスリー地方、朝鮮半島、樺太、日本、台湾、中国東南部などに分布し、日本には4亜種が留鳥として周年生息する。県内では全域の丘陵地から山地に分布し、大木のある落葉広葉樹林や針広混交林に周年生息し、大きな枯れ木に巣穴を掘り繁殖する。食性は雑食で、昆虫（甲虫類の幼虫）、節足動物、陸棲の貝類、果実、種子などを食べる。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内ではごく少数が生息場所として利用していると考えられるが、繁殖は確認されなかった。事業の実施に伴う樹林の伐採により、生息場所が減少するが、区域内を選択的に利用しているとは考えられず、同等の樹林環境は周辺地域に広く見られるため、影響は軽微であると予測される。
アカゲラ	対象事業実施区域内では秋季に1例、3～6月の猛禽類調査時に13例が確認された。区域外では通年、複数例が確認された。主に落葉広葉樹林や常緑樹林内で採餌する様子や鳴声が確認されたが、繁殖に関する情報は得られなかった。	本種は本州、四国の平地から山地にかけての森林に周年生息し、巣は木の幹に穴を掘って作る。県内には低山から山地の発達した広葉樹林や針広混交林で周年生息し繁殖している。冬季は平地や丘陵の二次林にも現れる。動物食傾向の強い雑食で、主に樹上で昆虫の他クモ、多足類、果実、種子などを食べ、森林への依存性が高い。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内を生息場所として利用していると考えられるが、繁殖は確認されなかった。事業の実施に伴う樹林の伐採により、生息場所が減少するが、区域内を選択的に利用しているとは考えられず、同等の樹林環境は周辺地域に広く見られるため、影響は軽微であると予測される。
アオゲラ	対象事業実施区域内では冬季、春季、秋季に各1例、3～7月の猛禽類調査時に10例が確認された。区域外では秋季および3～7月の猛禽類調査時に、複数例が確認された。主に落葉広葉樹林やアカマツ林、常緑樹林内で採餌する様子や鳴声が確認された。繁殖に関する情報は得られなかったが、環境を勘案すると繁殖している可能性がある。	本種は本州の平地から山地にかけての森林に周年生息し、巣は木の幹に穴を掘って作る。県内では留鳥として丘陵から山地の発達した林で周年生息し繁殖している。冬季は都市公園にも現れる。動物食傾向の強い雑食で、主に樹上で昆虫の他クモ、多足類、果実、種子などを食べ、地上でアリを食べることもある。森林への依存性が高い。	確認状況および生態から、対象事業実施区域内を生息場所として利用していると考えられるが、繁殖は確認されなかった。事業の実施に伴う樹林の伐採により、生息場所が減少するが、区域内を選択的に利用しているとは考えられず、同等の樹林環境は周辺地域に広く見られるため、影響は軽微であると予測される。
チョウゲンボウ	対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の4月～5月にのべ3例が確認された。	本種は、長野県以北で繁殖し、冬季には日本各地に広がるが、近年は滋賀県内での繁殖も確認されている。 <u>小型哺乳類(ネズミ類)やホオジロ類などの小鳥を捕食する。</u>	(情報を秘匿)
ハヤブサ	対象事業実施区域内外で猛禽類調査時の3月～6月にのべ5例が確認された。	日本では亜種ハヤブサが河川、湖沼、海岸などに周年生息する。食性は動物食の猛禽類で、主にスズメやハト、ムクドリ、ヒヨドリなどの体重1.8キログラム以下の鳥類を食べる。	(情報を秘匿)